



直木賞作家 志茂田 景樹

新しい年がきて。あつという間に正月も過ぎ、この稿が活字になる頃には復興の槌音も高らかに響きわたっていることだろう。

しかし、去年はほんとうに大変な年だったと思う。3・11後、絆、という言葉が盛んに使われるようになった。家を失い、肉親を失った方々の苦しみと悲しみに打ちひしがれた姿を見て、家庭が営まれていた家の持つ重みと、家庭が育む温もりの貴さを思い知らされた人が多かったに違いない。さらに、悲しみを乗り越

カゲキに行こう!

146 ボランティアをする若者気質

えて残された家族と手を携えて新たな出発点に立った人々に絆の奥深さを教えられた心地になった方も大勢いただろう。去年は数回にわたり、栃木県、宮城県、岩手県などの避難所や、被災した小学校、特別養護老人ホームなどを読み聞かせ慰問で訪れた。栃木県は被災地ではないが、福島の原因事故の避難者を多く受け入れ、最多のときは県内各地に一八カ所の避難所があった。「よい子に読み聞かせ隊」はそのうちの三カ所を訪れている。

そういう避難所を訪れて目についたのは大学生か、その年頃の若者のボランティアの姿である。

絆、といちばんほど遠い世代ではなかったか、と僕らの世代には思える。孤食を好み、シルバー席に股を大開きにして陣取り、スマホで配信される音楽に夢中になっている。その世代が足の不自由な被災者を背負って施設の庭を巡り歩き、

陽だまりで肩を揉んでいた。見慣れるまでは特別な若者たちだろう、と思つて自分を納得させたものだった。読み聞かせを終えて一息入れているときに、そういう若者の一人が話しかけてきた。

「こういうことであちこち慰問してはるんですか?」
「できる限りだね。中越地震や、玄海島地震の避難所も訪れたよ」

関西訛りがあるその若者に訊かれるままに、過去の読み聞かせ慰問の体験を話し、質問が途切れた機を逃さず訊き返した。

「こういうボランティアを始めたきっかけは何だったの?」

「小学一年のとき、実の兄のように思っていた従兄をなくしまして」
「事故か何かで?」

「いや、と阪神大震災をイメージして曖昧に訊いたら、その通りだった。震災ですわ。阪神大震災でなくしました。ボランティア

アの人がいっぱいいきってくれはったんです。肩車なんかして遊んでもらうて」

僕は黙つて頷いた。兄のように慕っていたらしい従兄を失い、きつとこの若者はそれまで意識していなかった絆というものを不意に断ち切られたことで強く意識に留めたに違いない。肩車をしてくれた若者にも絆を感じたのだろう。

「でも、仲間にはボランティアもやってみたい云うたノリでやつとるのも多いんですわ」

動機は何でもいい。やつとみるという気持ちが高いんだ、と僕は一人深く頷いた。

■ 志茂田 景樹 (しもだかげき) ■
1940年静岡県伊豆生まれ。中央大学法学部卒業後、様々な職に就く。1976年『やっどこ探偵』で第27回小説現代新人賞受賞。1980年『黄色い牙』で第83回直木賞受賞。「サカキバラ症候群の子どもたち」「心療内科」等の心を問う著作のほか、「おれたち不登校、個性と心で生きてやる」、「親と子の価値観戦争」等、現代の教育を問う著作も多い。